

# そこにある「知」を巡って

磯部 太一

北海道医療大学歯学部・大学教育開発センター

Minding lay expertise

Taichi ISOBE

## 1. 専門知を巡って

科学技術と社会の関係を考える上で、避けては通れない議論として「知識」とはどのようなものであるのかというものがある。「知識」については、例えば、哲学や社会学などの分野でこれまで議論の蓄積があるだけでなく、近年では人工知能研究においても議論の活況をみせている。その中でも特に、科学技術と社会の関係を考える上では科学技術社会論分野でこれまで議論の蓄積がなされてきた、「専門知」というキーワードが重要なものとなる。しかしながら、そもそも、何をもってして「専門知」を定義付けることが可能となり、今後はどのような展望が拓けているのであろうか。本稿では以上のような背景のもと、科学技術社会論分野における「専門知」の議論を足がかりとして、現代社会におけるLay expertise（素人専門知）の役割と意義について検討することとする。

英語でのLay expertiseは、素人専門知と一般的には訳され、在野にある専門知という見方もできる。例えば、科学技術分野の専門家が有する専門知は、当該分野についての専門知であるが、自分が専門としないそれ以外の領域については当然ながら専門知を有しているとはいえない。また、一見して専門知を有していない人々が、特定の領域については専門知を有するとみなすことができる状況もある。例えば、農業を生業にする人々は、学術的な農業分野の専門家ではないかもしれないが、農業に従事するという日常の活動を通じて、土壌や天候、作物の生育については専門的な知識を持つと想定される。彼／彼女らが有するのは、その一部においてはいわゆる大学レベルでの専門知識というわけではないかもしれないが、異なる形態の専門知であると位置付けることが可能である。

## 2. 「そこにある知」としてのLay expertise

科学技術社会論分野においては、Lay expertiseの訳語は、概ね、素人専門知で統一されているが、筆者はこの訳語選択は適切ではないと考える。その理由は、そもそも「素人」という用語に内包されるのは、専門家と比較して知識がないということで、その位置付けが格下に認識されるからである。これは、科学技術社会論分野の議論の中で、公衆の科学理解（Public Understanding of Science：PUS）という文脈に依存するものであると想定される。公衆の科学理解（PUS）の文脈において欠如モデルという観点から一般市民は捉えられる。それは、一般市民は専門知識がなく判断を

誤ることがあり、専門知識を提供すれば、その判断は正しいものとなるという理論枠組みである。しかしながら、この枠組みが十分には機能しないことから、この枠組みを超えようとする1つの理論枠組みがLay expertiseのはずであるが、その訳語として「素人専門知」を用いることは、公衆の科学理解（PUS）の理論枠組みで陥った状況を引きずるものとなってしまっている。つまり、ここで「素人」という用語を使用することは、公衆の科学理解（PUS）の枠組みの中で、一般市民を一段格下に見るような傾向となんら変わることはない。そこで筆者は、Lay expertiseについて「そこにある知」という用語を使用することを提唱したい<sup>1</sup>。ここには、一般市民の中でも、専門家とは異なる観点の「知」を形成し有している可能性があり、それは専門家の知識とは質的に異なるものであるが、それは決して専門家の知識と比較して見劣りするものではないという思想が込められている。そのため、本稿では、「そこにある知」という用語を統一して使用することにする。以下では、3つの「羊」を巡っての事例を中心に検討することで、「そこにある知」の内実に迫りたい。

### 3. 羊に関する3事例としての「そこにある知」

科学技術社会論の文脈で、「そこにある知」の問題を考える際には、Wynne（1996）が議論を展開した、羊飼いの有する専門知の議論抜きには語ることができない。ここでは、イギリス地方の羊飼いが持つ専門知について、科学技術の専門家との対比の中で以下のように議論が展開されている。チェルノブイリ原発事故を受け、この地方では放射能汚染の影響が危惧された。そこで、政府関連の専門家は、現地の牧場で調査を行ったが、その調査では大きな問題はないとされた。しかしながら、現地の羊飼い達はこれまでの自身の経験や勘を頼りに、専門家達の調査には土台無理があることを言及している（Wynne 1996）。ここでの現地の羊飼い達の持つ知識は、科学技術の専門家のそれとは異なる形態のものであったが、羊飼い達の知識は別の意味で専門知と呼べるものであろう。まさに、その土地や羊飼いの経験を基盤とした「そこにある知」であるといえる。

また、Rebanks（2015）においては、イギリスでの羊飼いの生活が描かれているが、その中では羊飼いの家族がどのように自然と格闘し、自身の生活を成り立たせていたのかが理解される。当事者である羊飼いの家族がどのような認識を持ち、自然環境を理解し、その土地のコミュニティを構築してきたのかが分かる。このような内部から理解される羊飼いの生活や環境は、外部から理解されるそれとは大きく異なっている（Rebanks 2015）。この事例についても、先のWynne（1996）の事例のような研究者からの分析的な視点ではないが、その土地や環境、生活容態に土着のまた別の「そこにある知」をみることができる。

先の2事例とは観点が異なるが、筆者が生活する北海道地域においても、日常生活の中で、「そこにある知」に遭遇することが多々ある。例えば、農業において、天候の読み方や、作物の種付け、収穫など、多くの場面で「そこにある知」が蓄積・活用されている。その場所でしかない環境や状況によって「そこにある知」は位置付けられ、その役目を果たしている。北海道は、とうきび（とうもろこし）の一大生産地であるだけでなく、その品質においても群を抜いている。また、先の羊飼いの2事例と関連させると、羊の牧畜についても北海道は大きな役割を担っている。ジンギスカンという北海道特有の名物は、かつてはその材料をほとんどオーストラリアやニュージーランドなどからの輸入に頼っていた。しかし、近年、道内のラム肉の生産が増え、それらを使用するケースが徐々にではあるが増えてきている。「食」には文化的な側面があり、北海道を代表する名物

<sup>1</sup> この用語選択は、科学技術社会論の議論の蓄積だけからでなく、文化人類学のローカル・ノレッジ（Geerts 1983）の議論などからも影響を受けたものである。また、近年の集合知の議論からも影響を受けている。

としてのジンギスカンが、道内で飼育・生産されたラム肉を使用して提供されるようになってきた事は注視されるべきであろう。このような状況のもと、道内の羊農家は、北海道の自然環境や風土などと協調・格闘しながら、「そこにある知」を育ててきたといえる。

#### 4. 「そこにある知」の今後を巡って

以上のように、これまで羊を巡る3事例を参照しながら、「そこにある知」について概観してきたが、最後に今後の社会に必要となる「そこにある知」の役割や意義を述べることで、本稿を閉じたい。先述したように、「そこにある知」においては、専門家とは異なる観点の「知」を形成し有している可能性があり、それは専門家の知識とは質的に異なるものであるが、それは決して専門家の知識と比較して見劣りするものではない。では、より積極的に、「そこにある知」を活かすことはできないのであろうか。そこで、1つの試金石となりうるのは、科学技術社会論分野における「科学技術についての市民関与」の取り組みである。この取り組みは、市民が何らかの方法で科学技術に直接的・間接的問わず関わることと定義できる。ここでいう直接的とは、市民が科学技術のイベントに参加したりするような能動的な関わりを指し、間接的とはアンケート調査への回答などのような一見受動的な関わり方を意味する。例えば、直接的なものとしては、科学技術の政策や発展過程への関わりなどがあり、代表的なものとして、デンマークを発祥とする市民参加型テクノロジーアセスメントなどは、直接的かつ積極的な市民関与の代表的事例であろう。他方、間接的なものとしては、科学技術についての世論調査の回答への協力や、文部科学省などが広く国民に意見を募集する科学技術に関するパブリックコメントなどがその範疇に入る。今後は、このような実践の中に、「そこにある知」をより積極的に取り込んでいくことが求められよう。例えば、農業分野においては、本稿で取り上げたような農家の「そこにある知」を集積・活用していくことが可能となる。現代における科学技術と社会の関係を構築していくためには、市民関与を皮切りに様々な方法によって、「そこにある知」を活かす方策を試行していくことが喫緊の課題となろう。

#### 参考・引用文献

- Geertz, C. (1983) “Local Knowledge” Basic Books. クリフォード・ギアーツ [梶原景昭他訳] (2014) 『ローカル・ノレッジ』岩波書店
- Rebanks, J. (2015) “The Shepherd’s Life : A Tale of the Lake District” Flatiron Books. ジェイムズ・リーバンクス [濱野大道訳] (2017) 『羊飼いの暮らし：イギリス湖水地方の四季』早川書房
- Wynne, B. (1996) ‘Misunderstood Misunderstandings : Social Identities and Public Uptake of Science,’ in A. Irwin and B. Wynne (eds), “Misunderstanding Science? The Public Reconstruction of Science and Technology” Cambridge : Cambridge University Press, 19-46.